

## 2019年度（令和元年度）第2回千葉県体育学会大会 抄録

### <一般研究>

#### スポーツ指導者の資格と制度に関する研究～アスレティックトレーナーに着目して～

○馬場宏輝（帝京平成大学）

1994年に日本体育協会が公認アスレティックトレーナーの資格認定を始め、2018年10月現在で3,825名が登録している。アスレティックトレーナーが活躍する場や環境は、それ以前に比べて整ってきたといえるが、アスレティックトレーナーに付与される資格は、その活躍を後押しする装置として十分に機能しているのだろうか。そこで本研究ではアスレティックトレーナーの資格と制度の視点から振り返り、資格の社会的価値を高める方法について理論的に考察する。資格の機能と価値を社会的に高めるためには、現在とは「異なる資格制度」としてアスレティックトレーナー自身が上位資格を検討・認定すべきである。また併せて顕著な業績・長年の功績をあげたアスレティックトレーナーに対する「表彰制度」もアスレティックトレーナー制度の一部として整備すべきである。

#### 大学生の運動習慣と過去の運動・スポーツ経験の関連について

○田中愛理（順天堂大学大学院）、河村剛光（順天堂大学）

【背景・目的】スポーツ参画における阻害要因のうち、「過去のスポーツ経験」が強い影響を与えている。したがって、過去の保健体育の授業や部活動での経験について、大学生の運動習慣の有無との関わりを詳細に検討することを目的とする。

【方法】日本国内の大学に通う1297名を対象にアンケートを実施し、現在の運動・スポーツ活動と中学校・高等学校の部活動、体育、保健の授業に関する分析を行った。

【結果・考察】運動習慣のある者において「その先生のもとで部活動ができてよかった」や「指導の仕方がうまかった」、習慣がない者において「優劣や順位がつくことが嫌だった」、「得意でない運動に取り組みたくない」の項目が有意に高かった。運動・スポーツ指導において、評価や順位づけをすることは、ネガティブな経験となり将来の運動・スポーツ実施を阻害する可能性がある。今後、指導者や教師の言動などを深掘りし検討する必要があると考えられる。

#### 弓道における適正弓力推定式の検討

○川路空夏（千葉工業大学大学院）

本研究は、弓道経験を有する85名の男女を対象に、会での最大筋力に対して何%の弓力の弓を使用しているのかの検討と、従来の三つの適性弓力推定式(会での最大張力/2、握力 $\times 1/2 \times (0.7 \sim 0.8)$ 、体重 $\times 1/3 \times (0.7 \sim 0.8)$ )の妥当性の検討を行った。対象者に対して、握力、体重、会での最大筋力の測定を行った。その結果、会での最大筋力に対する弓力の割合は、高的中者と低的中者の間で差は見られな

かった。また本研究で測定した、会での最大筋力と弓力の関係から作成した回帰式をもとに、従来の適性弓力推定式の妥当性の検討を行ったところ、右握力を用いた適正弓力推定式が最も妥当であることが明らかになった。以上より、従来の適正弓力推定式を用いる場合は、弓道のレベルに関係なく右の握力を用いた適性弓力推定式を使用することで自分の体力に合った弓を選ぶことができることが示された。

## 7人制ラグビーにおける防御戦術に関する研究

○廣瀬恒平(国際武道大学 体育学部)、中西貴則(国際武道大学 武道・スポーツセンター)、澤田大地(国際武道大学 大学院修士2年)

ラグビーは15人制を中心に発展してきた経緯があり、7人制ラグビーに関する指導法が体系立てられておらず、先行研究においても戦術に関する専門的な蓄積が乏しい現状が指摘されている。そのような中、廣瀬らは7人制ラグビーにおける戦術の検討を行い、ディフェンスラインの突破が攻撃の重要な要素であり、それを遂行するためにはオフロードパスが有効であることを指摘した。

そこで本研究では、7人制ラグビーの防御局面に着目し、ディフェンスラインの突破を阻止するために有効な防御戦術を検討し、現場におけるコーチングに有用な知見を得ることを目的とした。

得られた結果から、ディフェンスラインの突破阻止のためにオフロードパスを阻止すること、そのためにアシストタックルが有効であると推察された。さらにボールキャリアーがハンドオフを用いない場面ではボールタックルが、使用する場合にはロータックルが有効である可能性が示唆された。

### <実践報告>

体力、バットスイング速度、及び投球速度から大学野球選手の指導者による主観的評価を推定する重回帰式の作成

○井上哲朗、百武憲一、大西基也、岩井美樹(国際武道大学)

本研究では、大学野球選手における指導者の主観的評価と体力、バットスイング速度、及び投球速度との関係を重回帰分析を用いて分析し、指導者の主観的評価を目的変数、各測定値を従属変数とする推定式をより少ない変数で作成することを目的とした。

その結果、投手では、説明変数として立ち幅跳びと投球速度の2項目が抽出された。捕手では、身長と投球速度の2項目が抽出された。内野手では、除脂肪体重、握力、全身反応時間(最速)、バットスイング速度、投球速度の5項目が抽出された。外野手では、除脂肪体重、立ち幅跳び、バットスイング速度、投球速度の4項目が抽出された。

これらの式を用いることによって、守備位置別の野球の能力を簡単に推定できると考えられ、また、選手は、これらの測定項目に関する能力を高めることによって、指導者の評価が上がる可能性が考えられる。

## <授業研究>

### 国際武道大学の体育指導・評価法（サッカー）における学生の理解

—学生の自己評価による理解度と達成度を基にして—

○西園 聡史（国際武道大学）

近年、大学教育における授業は授業改善が求められている。スポーツ指導者、学校体育での指導や評価ができる学生の教育を担う「体育指導・評価法」では積極的な授業改善が行われてきた。「球技」サッカーでの授業改善についての研究もいくつか報告されている。しかし、習得状況を形成的観点から検討した研究例は見当たらない。しかしながら、指導者が受講生の理解度、達成度を知ることは授業を改善するために有効な方法となり得る。そこで、本研究は国際武道大学での「体育指導・評価法（サッカー）」の課題に対する理解、習熟を明らかにすることを目的とした。研究方法は第2回目から第15回目までの計12回の各授業の主要な学習内容に対する理解度及び達成度を合計し平均値を各授業課題における両者の値とした。結果、授業過程に伴う理解度と達成度は授業過程前半の個人戦術からグループ戦術において理解度は低下し、達成度は上昇する傾向を示した。

